

と、シンポジウムを開催することに成功した実行力とに深甚の敬意を表わしたいと思う。願わくは、36吋望遠鏡も学生の数に関しても近い将来に所期の目的が達成されることを。

☆ ☆ ☆

私は今この原稿を、ジャカルタのホテル・インドネシヤの豪華な一室で書いている。屋外は30度の暑さであるが、ホテルの室内は冷房がきいているのでまことに快適である。このホテルは日本人の手で作られたもので、

.....  
 雑 報  
 .....

**火星の大きさ**と形 フランスのドルフェは、彼の考案した二重像マイクロメーターを、ピクドミディ天文台の60cm屈折鏡につけ、火星の直径の精密測定を行なった。シーイング最良の時、倍率1000倍で直径測定の1回の精度は、角度の0.05秒であった。これは二重像マイクロメーターを大屈折望遠鏡につけて、火星の測定をした初めての試みである。

測定は1954年6月、1956年9月、1958年11月と3回の接近の、火星の直径の最も大きい時になされた。位相の影響をさけるために、測定は衝の日の前、および後の2日の間だけに限った。幸いにも3回の衝ともに、快晴と良好な星像に恵まれた。そして赤道の直径として6790km、極の直径として6710kmの値が得られた。これらの値は、火星の固体表面に関する値で、火星大気を考えれば、この値より30kmの増加となる。

これらの値は、赤い方は6300Åから、青い方は4700Åまでの間の、ちがった5枚の色フィルターを使った。どの色の範囲でも、火星の大きさは、誤差の範囲で一致しており、短波長ほど直径が大きくなるというライト効果は認められなかった。(下保)

**IUGG 総会** 本年8月、アメリカのバークレーで開催されるIUGG(国際測地学及び地球物理学連合)の第13回総会について、次のような細目が決定された。

期日は8月19~31日

会長はソ連のベロウゾフ(V. V. Belousov)で、加盟国は61個国に達し、次の7つのアソシエーションからなっている。

- 1) 測地 (IAG)
- 2) 地震及び地球内部の物理 (ISAPEI)
- 3) 気象及び大気物理 (IAMAP)
- 4) 地磁気及び起高層 (IAGA)
- 5) 海洋 (IAPO)
- 6) 火山 (IAV)
- 7) 水理 (IASH)

世界的水準の立派さであるとのことである。私はアメリカでもこんな立派なホテルにとまったことはない。世界中の人がここにとまって、新興国家の発展の意欲を見ると同時に、日本の技術の優秀さをも見てくれる。それは無論ありがたいことには違いないが、日本の天文学は果してこの技術に比例しているであろうか。私はあらためて、日本の天文屋たるもの大いにしっかりしなければならぬと思った次第である。

日本からは日高孝次東大教授を団長として、約14名の代表を派遣することになっており、更に欧米在住者の参加も数名予想される。この会議では国際重力網、Upper Mantle Project、人工衛星、太陽極小期国際観測年(IQSY)等についてかなり活発な討論が期待される。I.P.M.S.(国際極運動観測事業)中央局を担当する水沢からは弓が出席して、過去1年余にわたるI.P.M.S.の事業報告をIMG(測地)において行うことになっており、またI.P.M.S.の科学委員会がこの機会に開催される可能性が大きい、まだ決定はみてない。(弓)

**天文電報の近況** 彗星や新星の発見を知らせる天文電報は、国際天文連合(IAU)の中の第6(天文電報)分科会の仕事である。以下は第11回総会の報告書による4年間の現況である。

分科会の長はチェッコのブッチャー(Buchar)教授で、電報送受の実際的な仕事は天文電報中央局(Central Bureau for Astronomical Telegrams)が行なっており、今は中央局はコペンハーゲン大学天文台(台長はA. Reiz)にある。1947年以来中央局の局長であったピンクマンセン女史は、1960年6月27日に逝去されたので、その後は、テルネ(K. A. Thernöe)氏が引ついでいる。天文電報の送信先は73で、ほかに航空便の葉書又はリーフレットで、発見情報その他のニュースを流しているが、この配布先は158である。送受信の回数は次の通りである。

	電報回数		Circular 発行回数 (Nos.)
	受信	送信	
1957 (X20以後)	12	76	12 (1623—1934)
1958	11	240	28 (1635—1662)
1959	36	522	43 (1663—1705)
1960	29	602	42 (1706—1747)

なお日本では東京天文台が天文電報を中継することになっており、国内の確実な発見の情報は中央局へ通報し、また中央局からの発見電報はなるべく速やかに国内の各研究機関に通報している。(Kh)